

33【街の散策からの気づき発見】

街の散策の1年を振り返り、時の流れを考える

会員 K.T.

街の散策を始めてから1年余が過ぎた。立ち止まって、1年余を振り返ると、街の景色が変わっていることに気が付く。春日部駅東口駅前の様子は、壁の向こう側は変化しているも、東口駅前の様子は1年前との変化は少ない。無くなった景色はある。「富士ガーデン春日部店」が2025年1月末に閉店した。新しい景色もある。6月に「コープかすかべ東店」が開店、「春日部労働基準監督署」と「ハロワーク春日部」が移転してきた。春日部駅西口では、2024年11月にイトーヨーカドー春日部店が閉店、ふじ通り裏の旧飲み屋街区画は整地されている。

西口駅前の立体駐輪場は解体、西口駅前の線路沿いは拡張工事中、秋葉神社は境内の奥に再建されている。市の旧庁舎は、壊され、新しい中央公園の建設が予定されている。1年という時間が流れ、街の景色は、少しずつ変わっていることがわかる。

商業施設は人の流れを変える。旧ヨーカドーの通りは、人通りが少なくなった。学校通りは、日中も人通りが増えた。陸橋通りは、朝夕とお昼前後で車の渋滞が増えている。『自分自身の変化は？』、これはよくわからない。しかし、「万物は変転する」、私たちもまた変転の中で生きている。ふと、鴨長明の「方丈記」の一説を思い出した。

「行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世に中にある人と栖と、またかくの如し。玉敷の都のうちに棟を並べ、薨を争える、高き・卑しき人の住まいは、世々を経て尽きせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家は稀なり。或いは、去年焼けて、今年造れり。或いは、大家亡びて、小家となる。住む人もこれに同じ。所も変わらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二、三十人が中に、わずかに一人・二人なり。朝に死に、夕べに生まるる習ひ、ただ、水の泡にぞ似たりける。知られず、生まれ・死ぬる人、何方より来りて、何方へか去る。また知らず、仮の宿り、誰が為にか、心を悩まし、何によりてか、目を悦ばしむる。その主と栖と無常を争うさま、言はば、朝顔の露に異ならず。或いは、露落ちて、花残れり。残るといへども、朝日に枯れぬ。或いは、花しぼみて、露なほ消えず。消えずといへども、夕を待つことなし。（方丈記）」

この「行く河の流れは、(後略)」の文章で始まる有名な「方丈記」は、鎌倉時代の建暦2年(1212)に成立した鴨長明(1155年～1216年)の随筆である。長明が生きた時代の源平の争乱・鎌倉幕府成立、中世の乱世等を背景にしている。800字原稿用紙にすれば13枚弱、1万字程度の作品ながら、今日まで著名な古典として、多くの人に読み続けられている。長明は50歳を過ぎて出家し、京都の東山や大原に住み、晩年、承元2年(1208)頃、日野(現・京都市伏見区醍醐)に方丈の庵を建て、隠遁生活を続ける中で執筆活動を行った。

健保4年(1216)に亡くなるまでの8年間に、歌論書『無名抄』、鎌倉初期の仏教説話を編集した『発心集』、随筆「方丈記」を執筆した。私どもは、「方丈記」の冒頭の無常観から、長明は、はかないこの世を嘆いているように見えるが、そうではない。仏教では、「無常を観ずるは、菩提心の一なり。(無常を見つめることは、真の幸福を求める、という心を起こす第一歩である。)」という。仏教に深く帰依した長明は、限りある人生を見つめ、本当に大切なことは何か、を探した。「方丈記」は、現在の自分のありようを問う、自問自答で筆を置いている。長明の時代と現代とでは、大きく変わっているが、人が生きる時間軸の中で、『大切なことは何か』を求めることは、変わっていない、と思う。1年の街の変化から、古典を思い出し、時の流れを考えてみた。



春日部駅東口



春日部駅西口



東口旧スーパー



秋葉神社



コープ/東店



旧イトーヨーカドー



労基/ハロワーク



旧西口飲み屋街



内谷陸橋から春日部駅



市旧庁舎解体